

東北地方におけるブドウ栽培

山形県立園芸試験場

佐藤 孝 宣

1. 栽培の歴史

東北地方のブドウ栽培の歴史はかなり古く、山形県南陽市には約300年前より、「甲州種」が植えられていたことが石碑等で明らかにされています。明治20年頃、内務省勸業寮を通じ欧米からの品種が導入、明治25年頃には山形県南陽市でブドウ酒の醸造が始められました。

明治40年頃、米国種の「デラウェア」、「キャンベル・アーリー」が導入され、比較的栽培が容易であるため、これらの品種を中心に産地形成が図られました。とくに、昭和30年以降、生食向けの需要が増加するにつれ、生産量は年々増加し、また、「デラウェア」のジベレリン処理による種無しブドウの急激な需要増を伴い、生産量は昭和50年代まで伸び続けました。

その後、昭和57年をピークに老齢樹、傾斜地の低生産園の廃園増加などにより減少傾向にあり現在に至っています。

2. 生産の動向

東北地方のブドウの品種は「デラウェア」と「キャンベル・アーリー」が主体であるが、最近、消費者の嗜好が大粒種に変化していることから「巨峰」、「高尾」、「オリンピック」などの大粒種が増加しています。

また、近年、労働力不足から省力可能な醸造用品種の契約栽培が増加しています。東北地方にはワインメーカーが20数社あり、それぞれの地域の特性を活かしたワインを製造しています。主なワイン用品種は「メルロ」、「マスカットベリーA」、「リースリング・リオン」、「シャルドネ」などがあります。

東北地方のブドウ生産量は、昭和50年代までは増加傾向にあり、昭和55年をピークにその後減少して、現在は全国の生産量の約20%となっています。

3. 栽培技術の特徴

(1) 雨よけテント栽培

雨よけテント栽培は、ビニールで樹を覆い降雨を回避するため、生産の安定と品質向上、病害及び薬剤散布回数の軽減、作業効率の向上、降雹などの気象災害防止、など多くの利点があります。このため、年々、雨よけテント栽培面積が増加しており、ハウス面積と合わせると現在、結果樹面積の約30%の割合になっています。(写真1)



写真1 傾斜地ブドウ園の雨よけテント

(2) 樹相診断による高品質安定生産

ブドウにはそれぞれの品種ごとに、その樹が最も力の発揮できる適正な樹相(その樹の持っている総合的な生育相)があります。品質が良く商品性の高い果実を生産するには、いち早く好適樹相をつくり、それを維持していくことが重要です。

この樹相を診断するためには、新梢長、新梢の停止率、副梢の発生状況、葉色などを測定して総合的に診断します。とくに、葉の色をカラーチャート(葉色票)で測定することにより、樹の栄養状態(とくにチッ素)を的確に診断することが可能になります。

現在、数種の品種で好適樹相の指標が明らかになっており、各地域において、栽培管理面に活用されています。

(3) ジベレリン処理による無核化栽培

東北地方で栽培されている主要品種の「デラウェア」はジベレリン処理することにより、種なしブドウになってから大規模に普及してきました。最近は大粒種ブドウにもジベレリン処理することにより、無核化、果粒の肥大効果が明らかになっており、いわゆる高級ブドウの種なし栽培も増えてきています。

しかし、ジベレリン処理は開花前後の二回、果房浸漬処理のため、かなりの労力を必要とします。

(4) バンシャット、傘かけ、袋掛け栽培による病害虫防除

病害虫の防除は薬剤のみの対策では限界があるので、耕種的な防除を含めた総合的な対策が必要です。とくに、ブドウの主要病害である晩腐病は降雨により伝染するので、雨を遮断する方法として、結果母枝をビニール資材などでおおうバンシャット、果房へのカサ、袋かけにより予防しています。(写真2)

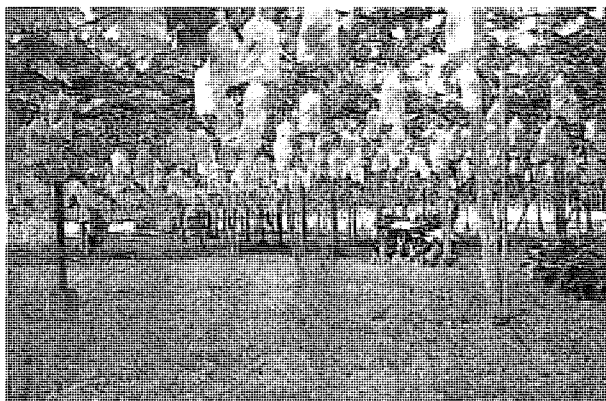


写真2 ブドウの袋かけ栽培